

ケショウヤナギの新しい分布地 (2) ー波田町黒川ー

横内文人

Fumito Yokouchi: New distribution of *Chosenia arbutifolia* (2)

ケショウヤナギは、北海道、本州（長野県）に飛び離れて分布しており、隔離分布種の代表として、あまりにも有名である。近年、このケショウヤナギの分布が梓川下流以外にも広がっており、各地から報告されている（大町市箆川、穂高町中房川、池田町高瀬川等）。

また、マスコミ等の話題にもなっている。筆者はかつて本誌に穂高町中房川の分布を報告したことがある（横内 1993）。さらに松本盆地全域のケショウヤナギの分布状況についても報告した（横内 1995）。梓川の最下限分布地は、豊科町熊倉（標高 約560m）である。

また、先ごろ穂高町烏川（標高 約600m）に於けるケショウヤナギの分布の情報を得たので観察した。

今回、波田町黒川でケショウヤナギの新しい分布地を発見したので報告する。



波田町黒川のケショウヤナギ

1. 波田町黒川のケショウヤナギ

波田町と梓川村との境を流れる梓川には、ケショウヤナギが多産する。梓川人景山（標高 680m）と梓川橋上流側（同650m）には大群落を形成し、近ごろは観光地となっている。今回、発見したケショウヤナギの新しい分布地は、波田町黒川(5万分の1地形図:塩尻・左上)である。松本電鉄上高地線終点の新島々駅から黒川林道をさかのぼること約11kmの場所である。黒川は、鉢盛山(2446.4m)から流れ出す梓川の一支流である。しかも流れは急峻である。しかしケショウヤナギの生育する川原だけは、川巾が広く、傾斜は緩やかである。黒川は川原の西側を北向きに流れ下っているが、ケショウヤナギは東側の川原の外れに生育している。筆者はかつて波田町誌自然額植物班の調査に参加し、この川沿いは何回も観察している（松田・横内1983）。その頃には、ケショウヤナギは全く認められなかったので、その後に生育したものであろう。

当地は、川巾が約30mあり、その長さは約100mもある。川原にはオノエヤナギやオオバヤナギ等が生育している。ケショウヤナギは、わずか1本のみが生育していた。そのケショウヤナギは、樹高は約10mで、根回りは69 cmであった。枝は四方へ広がり、その長さは約5mである。枝分かれの様子からみると樹齢はおよそ10年くらいと推定される。調査時には、すでに白いろう分かちついており、林道から眺めてすぐにその存在がわかった。雌雄の区別は不可能である。

この川原全域を調査したが、他にケショウヤナギは認められなかった。周辺の斜面は主としてカラマツの植林地になっている。山足部には、カツラ、サワグルミ、イタヤカエデ、

ホソエカエデ等が生育していた。川原に生育する樹木は、アカマツ、カラマツ、シラカンパ等の低木類であった。

当地は、一番近いケシウヤナギの分布地(梓川村八景山)から、直線にして約8kmある。

風による種子の飛来によって新分布地が形成されたものと考えられる。

2. ケシウヤナギ生育地の環境と植生

調査年月日: 1996年9月14日

調査場所: 長野県東筑摩郡波田町黒川

標高: 1370m

傾斜方向と傾斜角: N 6°

調査面積: 7m×7m

出現種数: 20種類

植生: 高木層 (10m/80%) ケシウヤナギ4・4, オノエヤナギ1・2, 低木層 (1.5m/10%) クマイチゴ1・2, シラカンパ+・2, アカマツ+, カラ

マツ+, ヤマナラシ+, オオバヤナギ+, 草本層 (0.8m/30%) ヨモギ2・2, フキ1・2, リュウノウギク+, コウゾリナ+, イタドリ+, ヨツバヒヨドリ+, ヤマハハコ+, キオン+, シロツメクサ+, アカソ+, ノコンギク+, シナノキイチゴ+。

参考文献

松田行雄・横内文人 (1983) 波田町の植物. 波田町誌自然民俗編pp.291-436 波田町誌編纂委員会.

横内文人 (1993) ケシウヤナギの新しい分布地一様高町中房川上流一 長野県植物研究会誌 26: 17-19.

横内文人 (1995) 松本盆地のケシウヤナギの分布 上高地自然史研究会ニュースレター9: 3-5 上高地自然史研究会.

〔植物ニュース〕

キンキバナアキギリ *Salvia nipponica* Miq. var. *kisoensis* K. Imai

本誌第23号に今井建樹氏によって発表されたものである。この度名古屋市の井波一雄氏から、この種が愛知県にも分布するとの連絡をいただいたので、この機会に、これを報告したい。井波氏によれば1953年6月28日に矢作川上流の山地で、これを採集し早咲キバナアキギリの名を用意していたもので、三河の各地や美濃南部の東西でも見ていると、お得意の線画を添えてのご連絡である。高山市の奥原豊一氏からは先年東濃地方でも各地で見られるとの連絡をいただいている。木曽では今井氏が2ヶ所で見ているとのことであり、この他にもありそうではあるが、それほど多いとは思えず、この少ない草本に注目された今井氏を賞したい。何れにしても、この種の分布の中心は東濃地方であるように考えられ、前川博士の美濃三河地域の1要素であるように考えられる。(奥原弘人)

〔植物ニュース〕

キンモウワラビ *Hypodematium crenatum* (Forsk.) Kuhu subsp. *fauriei* (Kodama) K. Iwats.

キンモウワラビは夏緑性で、根茎に黄褐色の鱗片が密生する特徴がある。関東、四国、九州にまれに産する。長野県下では、かつて南佐久(南牧)での記録はあるが、現在は、小諸市だけに自生地が確認されている。

昨年4月27日、小県郡東部町下大川の水田石垣で確認した。同じ石垣にヒメウラジロ、ゲジゲジシダも生えている。(池田登志男)

〔表紙写真の説明〕

イワムラサキ *Hackelia deflexa* について

イワムラサキは1年草の植物だが、絶滅危惧植物の一つで図鑑などによると日本国内では北海道と長野県に生育すると記述されている。北海道では現状不明である。長野県では2ヶ所で生育が確認されているが元々個体数が少なく、1年草で種子で繁殖しているため、常に絶滅の危険にさらされており、何らかの保護対策が必要である (井上記)